

# わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第135号

イザヤ 65:1

平成18年12月29日

キリストは、今の悪の世界から私たちを救い出そうとして、私たちの罪のためにご自身をお捨てになりました。私たちの神であり父である方のみこころによったのです。どうか、この神に栄光がとこしえにありますように。アーメン。私は、キリストの恵みをもってあなたがたを召してくださったその方を、あなたがたがそんなにも急に見捨てて、ほかの福音に移って行くのに驚いています。ほかの福音といっても、もう一つ別に福音があるのではありません。あなたがたをかき乱す者たちがいて、キリストの福音を変えてしまおうとしているだけです。しかし、私たちであろうと、天の御使いであろうと、もし私たちが宣べ伝えた福音に反することをあなたがたに宣べ伝えるなら、その者はのろわれるべきです。私たちが前に言ったように、今もう一度私は言います。もしだれかが、あなたがたの受けた福音に反することを、あなたがたに宣べ伝えているなら、その者はのろわれるべきです。いま私は人に取り入ろうとしているのでしょうか。いや、神に、でしょう。あるいはまた、人の歓心を買おうと努めているのでしょうか。もし私がいまなお人の歓心を買おうとするようなら、私はキリストのしもべとは言えません。兄弟たちよ。私はあなたがたに知らせましょう。私が宣べ伝えた福音は、人間によるものではありません。私はそれを人間からは受けなかったし、また教えられもしませんでした。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。

ガラテヤ人への手紙 1：4-12.

先月、エホバの証人が出しているチラシ「偽りの宗教の終わりは近い!」の主張を聖書に照らして検討しましたが、それは、一何を偽りとするかという根本的な問題です。すでに聖書の真理から反れてしまっていることをお断りした上で— 偽りの宗教がどのように滅ぼされることになるかをヨハネの黙示録17、18章に言及して解説し、腐った実を生み出している宗教から離れるようにと正しく警告しています。黙示録17章には神をけがす名で満ちた七つの頭と十本の角を持つ異様な「緋色の獣」と紫と緋の衣を着て金、宝石、真珠できらびやかに身を飾り、汚れに満ちた金の杯を持ってその獣に乗っている女、大淫婦「すべての淫婦と地の憎むべきものとの母、大バビロン」が登場します。ここで、前者は世界の政治経済勢力の象徴、後者は世界の偽りの宗教の権化の象徴です。聖書では真の神を知った者が神への忠誠を捨て、偶像の神々や偽りの神々、またこの世に迎合、墮落することを霊的姦淫とみなしていますから、「淫婦」という象徴的表現にはこの宗教が真の神信仰から反れた結果生み出されたものであることが示唆されています。サタンに支配された「地上の王たち」は世界制覇を成し遂げるため世界の巨大宗教勢力と結託してその統率力、権威を利用し、ついに全地を支配することになります。しかし目的を達成した時点で不用邪魔になった世界の巨大宗教勢力は王たちに捨てられ、滅びます。このように偽りの宗教は究極的には滅び、「わが民よ。この女から離れなさい。その罪にあずからないため、また、その災害を受けないためです」(黙示録18：4) との神の警告にもかかわらず、この偽りの宗教に陥ってしまった者たちはすべて、同様に滅びることになります。

確かに黙示録はじめ聖書の預言書は、世界統一宗教も政治経済勢力もやがては滅び、すべての人間の文明、諸王国が空しく滅びた後、キリストが千年間(ある一定の期間、すなわち永遠ではない)支配される神の国が地上に実現することを預言しています。この「神の国(天の御国)」と「パラダイス」(キリストを信じた者が甦りの体に与るまでの死後の待合所)、「天の父の御国(永遠の御国)」、「永遠のいのち」、また、「黄泉(暗やみ)」(死人の待合所の一般的用語)と「火と硫黄との池(地獄)」や「永遠の刑罰」等々、聖書では使い分けられている用語が「天国」と「地獄」という二つの概念の中にすべてひっくるめて伝えられてしまったために、キリスト教界においても混乱が起こっているのが現状ですが、エホバの証人も聖書の語る終末論を正しく理解していないようです。真の宗教とは、互いに殺し合うのではなく愛を實踐し、伝統や教理ではなく神の言葉『聖書』に基を置き、家族の絆を強め、高い道徳基準を實踐する宗教であると、まことに優等生的主張を掲げているので、この世の不正、虐げ、搾取、道徳的墮落、闘争、戦争にへきえきした多くの人たちが平和主義、高い道徳基準を訴えるエホバの証人の主張に賛同するようですが、これは一種の理想的な“宗教(人間の手、努力による満足、解放)”ではあっても、聖書が語る“キリスト信仰(神が与えてくださる救い、罪からの解放)”ではないのです。神は、理想を實踐できない人間だからこそ、神からの一方的な救いという賜物をくださったのでした。

キリスト教、あるいはキリスト信仰とエホバの証人の主張との違いが分からない方が多いようですので、物見の塔組織の設立の歴史、何度も訂正されてきた預言の解釈や教理などの実体を検討することにしましょう。米国ペンシルバニア州ピッツバーグで生まれ、プロテスタント長老教会に通い、熱心な福音派クリスチャンであったチャールズ・ラッセルは16歳のとき、従来の教会が教えていた「地獄」の教理を、愛の神がそのような刑罰を下されるわけがないとの感情的拒絶から受け入れ

ることができず懐疑的になり、宗教『エホバの証人』を設立しました。そのころ、ウィリアム・ミラーがキリストの再臨が1843年に起こると預言し実現しなかったため、1844年に訂正し、それでも起こらなかったとき、再臨はすでに天において実現したのだが目には見えなかったとの見解がミラーの追従者たちによって広まり、安息日再臨派の人たちはセブンスデーアドベント教会を設立しました。ラッセルは「永遠の刑罰」を受け入れず、死は絶滅でその瞬間すべてが終わると信じるこの派の影響を強く受け、自分の解釈に確信を持つことになりましたが、やがて他の点で見解の相違が生じ、安息日再臨派とはたもとを分かちます。1879年発行の著書にラッセルは、キリストの再臨が1874年にだれにも見られず霊的に起こり、1914年に神の裁きが全人類に下ることによってキリストの御臨在は絶頂に達し、異邦人の時代は終わり、神の国が設立されると予言し、また、1880年代にはペンシルバニアとニューヨークとに物見の塔聖書協会を設立し、1916年、第一次世界大戦がハルマゲドンの戦いであると信じて、亡くなったのでした。その後協会はヨセフ・ラザフォード、ナタン・ノール、フレデリック・フランツ、ミルトン・ヘンシェルらに引き継がれ今日に至っているのですが、その間に聖書解釈の訂正、指導者らの予言の訂正などが何度も行なわれ、事実上、創始者ラッセルの唱えた1874年、1914年の意味はじめ、ほとんどの聖書年表はもはや破棄され新しい解釈に変えられています。今日では、1914年はキリストの肉眼で御臨在の終わりではなく、始まりであったと大きく訂正され、彼らの聖書研究のために協会独自の『新世界訳聖書(NWT)』を出版し、彼らの主張の基盤をもつばら、二十世紀半ばに発行されたこの聖書に置いているのです。

さて、エホバの証人は自らを権威ある唯一真の宗教組織と自負し、信者たちは指導者層への絶対的服従を強いられ、徹底した階層社会を堅持していますが、一もつとも昨今は以前より緩和された点もあるようですが、その徹底振りには組織の方針に異議を唱えた有力な指導者たちが除名されてきたという歴史から明らかです。しかし神の言葉聖書を根拠に組織のあり方を正当化しているために、多くの一般信者(黙示録の預言から十四万四千人だけが生まれ変わった、信仰に覚醒した特別階級のクリスチャンとの見解)は、盲目的な献身を受け入れてしまっているようです。実際には、多くの聖書解釈の誤りが指摘されるのです。まず、「彼らは私の声に聞き従い、一つの群れ、ひとりの牧者となるのです」(ヨハネ10:16)、「みな一致して、仲間割れすることなく、同じ心、同じ判断を完全に保ってください」(コリント第一1:10)、「主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです」(エペソ人4:5)等が唯一、真の宗教組織は一つというエホバの証人の根拠とする聖句ですが、文脈の中で解釈すれば、自ずとその意味が明らかになります。信者たちは集合的に一つの群れを成しますが、それは人間の作り上げた一つの特定の組織に属するからというのではなく、真の羊飼いなる「良い牧者」イエス・キリストの声を聞いて集まってくるからというのが、ヨハネの福音書10章の教えで、特定の宗教組織を擁護するためのメッセージではないのです。またパウロがコリントの教会に対し、一致して仲間割れすることがないようにと勧めたのが、分裂が背信とか偽りの宗教を証立してしるしであるとして語るためであったのでないことは、分裂にもかかわらず、主にある兄弟として一致してほしいという訴えの文脈から明らかです。キリスト信仰の真髄『イエス・キリストは人類を救ってくださった神で、イエス・キリスト以外に父なる神を知る方法、救いはない』においては「信仰は一つ」でも、派生的な事柄に関する解釈の違いは起こり得るものと、ローマ人への手紙14章でパウロが説いているように、人間が作った特定の宗教組織だけを正当化する裏づけとなる聖句は聖書にはないのです。二つ目に、マタイの福音書24:45-47のたとえに登場する、主人から全財産を任された「忠実な思慮深いしもべ」をエホバの証人の指導者階級に見立て、残りの一般信者たちには絶対的服従を要求するわけですが、このたとえは特権階級のしもべについて語っているものではなく、一個人であろうと群れであろうと、忠実であるか否かによって裁かれるということを語っているものです。さらに、使徒の働き15、16章には、エルサレム教会の使徒たちと長老たちの決議に諸教会が従ったことが記されていますが、それは将来の宗教組織の在り方のモデルとして書かれたのでもないし、また、エホバの証人を、イエスの直弟子を長として設立された西暦一世紀当時のエルサレム教会になぞらえることは不可能です。三つ目に、聖書を信仰の唯一の基準とするという点ではエホバの証人の主張は正しいのですが、使徒の働き17章に登場するペレヤの信者たちのように、たとえ権威ある指導者たちの意見、解釈であっても、聖書の原則に則っているかどうかを常に吟味し、正しく評価する責任が御言葉を受け取る一般信者の側にもあることを忘れてはならないのです。組織、指導者への盲従は神の国の原則ではなく、聖書が証する神の一貫した教え、真理に最優先で忠誠を保つべきなのです。

冒頭に引用したガラテヤ人への手紙の中でパウロは、「私たちであろうと、天の御使いであろうと、もし私たちが宣べ伝えた福音に反することをあなたがたに宣べ伝えるなら、その者はのろわれるべきです」と強い口調で、真理の曲解、人間の感情による聖書解釈と神概念、間違った福音を伝えることの刈り取りの恐ろしさを繰り返し警告しています。人の関心を買うために人間の感情に合った受け入れやすい偽りの福音がすでに流布し始めていた一世紀の初代教会に対し、善悪、聖い、聖くないを神の掟に則って正しく判断し、神の絶対基準を維持すること、すなわち、人間の感情、考え、習慣から都合の良い神のイメージを作り上げるのではなく、キリストが語られた最初の福音に留まることを、パウロは訴えたのです。「キリストの福音を変えてしまおう」という試みは、過去二千年、人間史において、聖書が証する唯一真の神を知った者たちの中から起こってきました。最初の人間の心にサタンが疑いを入れ、誘惑に陥った人間は神への絶対的信頼を失い、反逆、墮落が始まったように、キリストの不忠実なしもべによる真の福音からの逸脱、背信は、人間の感情、考えを第一優先とする人道主義、博愛主義、平和主義に飢え渇く時代の流れに乗って、神不信から聖書の信憑性、キリスト信仰への疑惑へと今後ますます増えていくことでしょう。偽りの福音や偽りの聖書解釈から離れることはその罪に関わらないための最初のステップなのです。